

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 岡山県岡山市東区西大寺上 1-19-19
管理機関名 学校法人 森教育学園
代表者名 森 靖喜 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日(契約締結日)～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 岡山学芸館高等学校

学校長名 森 健太郎

3 研究開発名

「グローバル社会に貢献できるリーダー育成のための開発研究」

4 研究開発概要

本校は独自に設定した5つの資質を身に付けることで世界に貢献するグローバルリーダーの育成を目指す。そのため「途上国の貧困の悪循環の是正に高校生ができること」をテーマとした。

1年次生は、本校作成のPPTを用いた授業を行い、今年も改訂作業を行いながら質の高い教育プログラム作成に尽力した。また、積極的な高大連携授業を推進し、高大連携授業のみならず、来年度に接続するために実施しているカンボジアFWにて2日間大学生と一緒に活動する取り組みを行った。

2年次生は1年次の学びを踏まえた本格的な課題研究を実施した。生徒個々の興味関心に従った14のテーマ(ゼミ)を設定して、Action Planの策定と実行を行った。最終的に約70の課題件研究活動が行われた事は研究テーマの個別最適化が推進されたと自負している。また、2年次のカンボジアFWには卒業生2名が帯同し、海外研修のプログラムも積極的に改訂を進めた。

3年次は今までの学びと活動を校外コンテストへの応募、選考を伴う大会への参加等を通じてその力をさらに向上させるとともに、普及活動に努めた。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
A)事務職員の雇用	→												
(A)経理事務の管理	→												
(B)ALTの雇用	→												
(C)講師の派遣依頼の推進	→												
(D)普及活動				→									

(2) 実績の説明

(A)事務職員の雇用と経理事務の管理

今年度も引き続き SGH 事務を専門とする事務職員を雇用した。雇用することで教職員の業務負担を軽減し、円滑な運営を支援した。特に経費処理、HP・SNS の更新・ブログの整備、授業実施に向けた事務作業において非常に有効であった。

(B)ALT の雇用

昨年度同様、ALT の教員を 1 名雇用し、英語の授業内容の改善に努めた。研究報告会では英語によるプレゼンテーションを行ったが、その際の指導成果が顕著にみられた。

(C) 講師の派遣依頼の推進

昨年に引き続き、管理機関としても外部講師を積極的に招聘し、本事業の推進に努めた。

(D)成果普及のための取り組み内容と成果

国際理解教育を進める市内の各小中学校において積極的に講師派遣を行い、SGH 活動の普及、及び国際理解教育の推進に努めた。また、他校の研究報告会にて生徒を相互派遣し、お互いの SGH 等における研究成果の普及に努めた。更に、地元放送局と協力して取り組んでいる SDGs の番組内にて SGH の取り組みを生徒が紹介、G20 保健大臣会合における生徒の課題研究発表（提言発表）など、国内外に積極的な普及活動を行った。今年度は例年よりも多く、校外での発表機会を頂き、生徒の活動がより社会的になった。これにより生徒の研究に対する自己肯定観や課題研究に向う姿勢が例年以上に向上した事は、普及活動を積極的に行った成果であると考えられる。以下、本年度派遣・取り組み実績一覧。

■令和元年度普及活動実績一覧（生徒関係）

- ・5/11 児島湖流域エコウェブ・・・生徒4名、2件発表
- ・5/16 世界海事大学（WMU）研究発表・・・生徒4名、1件発表
- ・5/18 岡山フェアトレードの会主催岡山フェアトレードデー！・・・生徒9名、2件発表
- ・6/16 岡山の若者は語るパネリスト・・・生徒1名、1件発表
- ・7/5,10,4,11/19 岡山市立西大寺小学校講師派遣・・・SGH 運営部長および生徒14名
- ・7/13,10/12,11/30 本校オープンスクール SGH 講座開催
- ・7/31 岡山大学 CLS プログラム学生研究発表交流会・・・生徒12名、4件発表
- ・9/26KSB 瀬戸内海放送「高校生と見つける私たちのSDGs」・・・本校特集放送
- ・10/18SDGs ネットワーク岡山主催 G20 保健大臣会合前夜祭・・・生徒4名、2件発表
- ・10/19G20 保健大臣会合にて高校生提言・・・生徒4名、1件発表
- ・10/25 岡山市立伊島小学校講師派遣・・・SGH 運営部長および生徒16名（留学生含む）
- ・1/28 岡山操山高等学校 SGH 研究発表会・・・生徒7名、3件発表
- ・2/5 岡山城東高校課題研究成果発表会・・・生徒8名、3件発表
- ・2/15 岡山学芸館 SGH 研究報告会・・・一般観覧者70名参加
- ・2/23 岡山 SDGs フォーラム（多文化共生分科会）登壇・・・生徒9名、1件発表
- ・3/5 岡山市立西大寺小学校講師派遣・・・コロナウイルスの影響により延期
- ・3/6 岡山市立旭東中学校講師派遣・・・コロナウイルスの影響により延期

■令和元年度普及活動実績一覧（教職員関係）

- ・NPO 法人日本ファンドレイジング協会社会貢献教育推進委員拝命・・・SGH 運営部長
- ・日本特別活動学会岡山大会実行委員（登壇予定）・・・SGH 運営部長および教諭1名

■令和元年度普及活動実績一覧（刊行物等）

- ・SGH ニュースの発行・・・年6回発行し、広域に配布
- ・SNS（Facebook）での情報発信・・・年43回投稿
- ・HP、ブログの整備

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
グローバル課題研究Ⅰ	→											
グローバル課題研究Ⅱ	→											
グローバル課題研究Ⅲ	→											
1年生海外フィールドワーク									→			
2年生海外フィールドワーク					→							
成果普及活動						→						
校外連携	→			→			→					

(2) 実績の説明

以下、今年から新たに取り組んだ内容や顕著に改訂、活動を行ったものを中心に報告する。また、実績の具体的数値等は「7 目標の進捗状況、成果、評価」にて補完する。

■研究開発の実施規模

令和元年度岡山学芸館高等学校在籍生徒数

科コース編成		1年	2年	3年	小計(人)
普通科	清秀高等部	32	27	24	83
	医進コース	15	16	17	48
	スーパーVコース	67	75	69	211
	特別進学コース	121	118	128	367
	進学コース	167	191	159	517
英語科		23	27	22	72
合計(人)		425	454	419	1298
SGH 対象数生徒		258	263	260	781

※SGH 対象生徒数は全校生徒の 60%

全校生徒 1298 名のうち、進学コースを除く 781 名を対象にして SGH 事業を実施した。全校生徒に占める SGH 対象生徒の割合は 60%である。また、本校は幅広い科コース編成を行っており、多種多様な生徒が在籍している。そのため、本校における SGH 事業は、様々な背景、意識の生徒に対してアプローチできるカリキュラム開発研究を行わなくてはならない。多様な生徒を対象にすることは容易ではないが、より多くの生徒が相互交流を通して学びを深められるように毎年シラバスと教材を改訂しながら、より効果的な開発研究を進めている。

■運営体制について

・SGH 運営部の人員について

今年度は 26 名体制（地歴公民 5 名、英語 8 名、数学 3 名、理科 5 名、国語 1 名、情報 1、保体 2 名、SGH 担当事務 1 名）で運営していた。また、1 年生の授業はオリジナル教材の運用が定着化したことにより、原則担任が授業を受け持つことを昨年度から実施している。新たな教授法（アクティブラーニングやグループワーク）について、より多くの教職員が触れ、実践する機会を創出している。そのため、管理職を除く SGH 対象科コースを担当する教員のうち 76%が SGH の授業を担当することになっており、指定初年度の 6 名体制から飛躍的に実施体制が拡充した。

■授業開発について

・グローバル課題研究 I（1 年生）

具体的な改善点は 2 点。1 点目は「高大連携事業の改革」である。単なる講義形式にならないように、本校の目的意識と大学側（教授および院生・学生）とのベクトルを合わせるために、高大連携授業が始まる秋に向けて夏から打ち合わせを重ねた。また、教授による講義をインプットベース、その後に行われる院生・学部生の授業をアクティブラーニング形式によるアウトプットベースによって高大連携授業を組むことで、内容の深化や定着をより促すことができたと自負している。カリキュラム編成において、実施することではなく、何をどのように学ぶかという点に注視しながら取り組めた事は本校のカリキュラムマネジメントの向上においても新たな視座を与えるものとなった。

更に今年度は 1 年生のカンボジアフィールドワークにおいて、その 2 日間を岡山大学のインターナショナルチャレンジプログラムでカンボジアフィールドワークを実施する学部生と引率教授にご協力頂き、共に日程を消化する取り組みを実現させることができた。特に每晚実施する振り返りミーティングでは学生、教授、本校教員が主導して実施し、例年になく実りあるミーティングを実現させることができた。

加えて、今年の 1 年生に対しては北陸先端科学技術大学院大学（以下、JAIST）による、多様性特別プログラムを実施することができた。本校がグローバルリーダーに必要な 5 資質を踏まえた、プログラムであり、SGH 事業をより深化させるためのプログラムとして機能することを期待している。本プログラムは希望生徒 34 名により実施し、プログラムを通じた生徒の変容は今後、大学側が作成したルーブリックを基にその変容を分析する。

このように、SGH 事業の目的・目標を大学側と密に共有することで、高大連携の新たな施策に取り組めることが実感として理解することができた。また、高校側が取り組みを一方的に享受するのではなく、相互に利益を享受する仕組みを作ることが重要であることも再認識することができた。

2 点目は、本校独自に作成している教材を今年度も改訂したことである。毎年、過年度の様子を

振り返りながら、1年次に求めるグローバルリーダーの資質「グローバルマインド」「問題解決力」を中心に内容を改訂した。授業者がどのようにファシリテーションするのかをインプットとアウトプットを明確に理解できるように取り組んだ。アクティブラーニングの実施に関しては「交渉型コミュニケーション能力」「協働力」の養成を目的に、毎年取り組むワークを変更するなど、ブラッシュアップを行っている。本年度も生徒の実情に合わせ、独自に作り上げたワークを見直して実施した。このように、毎年の改定作業が教員間で定着した事は大きな成果であると自負している。

・グローバル課題研究Ⅱ（2年生）

具体的な改善点は2点。1点目は、テーマ（以下ゼミ）数の増加による多様な生徒の興味関心に対応である。今年は14のテーマを設定した。その中には地域のグローバル化や価値観に関するテーマも設定し、今までの課題研究よりもより多面的なテーマ設定を実現させることができた。また、テーマ設定に際しては、SGH 生徒運営委員の意見も参考にした。生徒が主体的に学ぶ環境整備がこれにより昨年よりも向上したと自負している。

2点目は、ゼミ内の課題研究数を、個別最適化を実現するために複数設定したことだ。結果として、校内に約70の課題研究が行われる環境が整備された。一方、生徒の自主的な活動が、自己を成長させるに資する学びに繋がっているかどうか重要である。そのため、統一した取り組み指針を提示することが求められる。ポスターのテンプレートの作成、Action Report（論文）のテンプレート作成を継続して行うと共に、指導書として独自に作成した Action Plan Booklet に更なる改訂をくわえ、どの教員でも指導ができる環境づくりを推進させた。また、昨年度試用した2種類のルーブリックを本格的に運用し、生徒個々が現在の状況を目標に照らし合わせながら、常に次に取り組むべき指針を明確に持てるような施策を行った。結果として、教職員が当初イメージしていたよりも高度な研究活動が生徒の自主性に基づき行われたことから、一定の評価と昨年度からの指導内容の向上が見られたと自負している。

■普及活動の推進について

管理機関の積極的な校外派遣に伴い、多くの生徒教職員を校外に派遣した。以下、生徒がSGH活動を広く社会に普及する活動を行った件数と参加生徒数を一覧にする。加えて、教職員派遣、インターネットによる発信に関する詳細を合わせて報告する。

令和元年度普及活動実績一覧

実施日	活動イベント名称等	参加生徒数
5/11	児島湖流域エコウェブ（研究発表）	4名
5/16	世界海事大学（WMU）研究発表	4名
5/18	岡山フェアトレードの会（研究発表）	9名
6/16	岡山の若者は語る（パネリスト）	1名
7/5	岡山市立西大寺小学校出前授業	4名
10/4	岡山市立西大寺小学校出前授業	1名
11/19	岡山市立西大寺小学校出前授業	24名
7/13	第1回オープンスクールSGH講座	10名

10/12	第2回オープンスクール SGH 講座	14名
11/30	第3回オープンスクール SGH 講座	8名
7/31	岡山大学 CLS プログラム学生研究発表交流会	12名
9/26	瀬戸内海放送「高校生と見つける私たちの SDGs」	4名
10/18	G20 保健大臣会合前夜祭（研究発表）	4名
10/19	G20 保健大臣会合本会議（高校生による提言）	4名
10/25	岡山市立伊島小学校出前授業	24名
1/28	岡山県立岡山操山高校 SGH 研究発表会	7名
2/5	岡山県立岡山城東高校課題研究発表会	8名
2/15	岡山学芸館高校 SGH 研究報告会	25名
2/23	岡山 SDGs フォーラム多文化共生分科会（研究発表）	9名
3/5	岡山市立西大寺小学校出前授業	延期
3/6	岡山市立旭東中学校出前授業	延期
合計（延べ数）		<u>176名</u>

・ SGH ニュースの発行

SGH 活動を広めるために今年は年 6 回の発行を行った。主に保護者と学外向けに配布を行った。

・ SNS の活用

指定初年度より Facebook にオフィシャルページを開設している。現在、ページへの“いいね”数が 508 件(2020 年 3 月 5 日現在)であり、引き続き SGH 関係のオフィシャルページでは全国最多となっている。（本校調べ）本校オフィシャルページとの相互シェアにより、最大リーチ数実績約 3200、平均リーチ数約 700であり、一度の投稿で多くの方々に活動を周知できていることから、有効な普及活動の手段として来年度も継続する。今年は年間 43 回の新規投稿を行うことができた。

■教員の外部連携

今年度は教員の外部連携も例年以上に促進された。NPO 法人日本ファンドレイジング協会が設定する社会貢献教育推進委員への就任、日本特別活動学会岡山大会実行委員の就任など、SGH 事業への取り組みが、外部組織との連携や協力を推進させた事は大きな成果である。

7 目標の進捗状況、成果、評価

指定当初の目標設定に従い、以下報告する。

■自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒について

一昨年度から設置されたボランティア委員会（教員分掌は社会貢献部）の積極的な活動により、本年度も多くの在校生が社会貢献活動に参加することができた。また、課題研究に関わる活動の一環として多くの生徒が自己研鑽活動に励むことができた。SGH 対象クラスにおいては 63%(実数 488 名)の生徒が自己研鑽活動・ボランティアに参加した。また、全校生徒で集計した場合でも 54%(実数 706 名)の生徒がボランティアに参加できており、全校体制で社会貢献を実践する風土が培われている。指定時の目標値 500 名を概ね達成することができた。例年より数値が減少して

いるが、予定されていた活動がコロナウィルス等の影響により中止されたことが少なからず関係している。

■自主的に留学、または海外研修に行く生徒数について

本年度、SGH 対象クラス生徒 131 名、非対象クラス 32 名が自主的に海外留学・研修に参加した。目標値 250 名を達成する事はできなかったが、募集人数の多いヨーロッパ及びオセアニア方面の 3 つの研修がコロナウィルスの影響で中止になったため、約 240 名の渡航が実施されなかったことが影響している。

しかしながら、本校主催の海外研修は 6 つの海外研修を実施（中止の研修を除く）し、昨年の 7 つの海外研修の実施と変わらない環境を整備した。加えて英語科の 1 年間留学(27 名)も例年通り実施した。

■将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合について

生徒に対して行ったグローバルアンケートを元に集計した。また、3 年次の卒業段階での数値をここでは抽出する。「将来国際的職業で、世界で活躍したい」の項目に対して YES と回答した生徒は SGH 対象クラスの生徒が 32%、非対象クラスが 14%となっており。18%の差が生じている。また、「海外留学を希望する」の項目に対して YES と回答した生徒は SGH 対象クラスで 46%、非対象クラスが 16%と 30%の差が生じている。

数値の伸びしろはあるが、「今年の SGH を受講したことで世界の出来事への興味が深まった」という質問に対しては 3 年生が 73%と昨年比 10%の向上、2 年が 73%、1 年生の 69%が YES と回答している。昨年同様に海外への意識や感心が高まっていることが分かる。一方で、キャリア形成意識にその伸びしろがあることが分かる。卒業時における数値の向上は SGH 事業に対する評価に値するが、国際社会で活躍したいという意識を醸成させる取り組みが今後必要である。また、SGH 非対象クラスに対する SGH 事業の推進も今後必要な施策である。

■公的機関から表彰された生徒数、またはグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数。

今年度も引き続き、積極的に校外のコンテストに応募することを推奨している。今年度の受賞者は 52 名となり、昨年度の 25 名から飛躍的に増加した。主な受賞一覧は以下の通り。愛媛大学社会共創コンテスト 2019 地域課題部門準グランプリ、甲南大学リサーチフェスタ学長賞（最優秀賞）、甲南大学リサーチフェスタ審査員特別賞、甲南大学リサーチフェスタクリエイティブテーマ賞、甲南大学リサーチフェスタアトラクティブプレゼンテーション賞、北海道大学主催海の宝コンテストマリン・カルチャー部門オーシャンドリーム賞、北海道大学主催海の宝コンテストマリン・カルチャー部門マリンラーニング賞、北海道大学主催海の宝コンテストマリン・カルチャー部門ブルーオーシャン賞、北海道大学主催海の宝コンテストマリン・カルチャー部門近畿・中国ブロック優秀賞、岡山県高等学校弁論大会優勝、第五回全国ユース環境活動発表大会中国ブロック大会協賛企業特別賞、岡山ボランティアアワード大賞（最優秀賞）、岡山ボランティアアワードキラリ！高校生賞、日本生物学オリンピック優秀賞など。

■生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFR B1～B2レベルの生徒の割合について

数値は令和元年度3年生の卒業時におけるCEFR B1～B2レベル保持者を集計した。本校では英語検定、GTEC、TOEICの受験を推奨しているため、いずれかの検定でB1レベルを越えた生徒数を集計した。

その結果、SGH対象クラス3年生260名中、121名がCEFR B1以上のレベルを達成した。その割合は46.5%であり、昨年度の39%から7.5%UPと飛躍的に数値が向上した。指定時の目標数値である25%を大きく上回ることができた。また、B2達成者は18名、C1達成者は2名という結果であった。

■課題研究に関する研修参加者数について

- ・課題研究に関する国内研修およびフィールドワーク参加者数

課題研究に関する国内研修およびフィールドワーク参加者数は195名(実数)であった。目標数値180名を達成することができた。この背景には、2年生の各ゼミにおいてそれぞれフィールドワークを設定したことと、学校主催による研修を積極的に開催したことが要因として挙げられる。一方、述べ数では数値がほぼ倍増することから、同じ生徒が複数回参加する傾向が見られる、実数の数値向上にはのびしろが見られることから、積極的な研修参加、フィールドワークの設定が今後も必要である。

- ・課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数

カンボジアの大学、高校、中学校、小学校を合わせて6校・団体との連携（パンニャサストラ大学、ソムダイアウ高校、大正小学校・中学校、チェイ小学校、Chong Khneas小学校、むつみ日本語学校）を達成した。

- ・課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画したのべ回数（人数×回数）

本年度も岡山大学を中心に様々な高等教育機関に課題研究に関して、講義・指導・助言を頂くことができた。特に高大連携事業に対する改革も進めたことから、海外フィールドワークでの協働や2年生のゼミ活動に密接に関わって頂く機会を創出することができた。これにより、合計64名(述べ数)の教授、院生、学部生に協力をいただくことができた。指定時の目標である42回も達成することができた。今年度の関係高等教育機関は以下の通り。岡山大学、北陸先端科学技術大学院大学、甲南大学、昭和女子大学、パンニャサストラ大学（カンボジア）

- ・グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数

SGH甲子園、甲南大学リサーチフェスタ、愛媛大学社会共創コンテスト2019、大分大学なるほどアイデアコンテスト、全国高校生MY PROJECT AWARD、日本生物学オリンピック、JICAエッセイコンテストなどを中心に234名(述べ数)の参加者を達成することができた。昨年度の121名から大幅に参加者が向上した。この背景には、生徒が課題研究の評価を自主的に外部に求めるようになったことが大きな要因である。なお、指定時の目標である180人も大幅に上回って達成することができた。

・帰国・外国人生徒の受け入れ者数

長期留学生 24 名、短期訪問は 11 団体 160 名、合計 182 名の留学生を受け入れた。昨年から微減したものの、目標人数 130 名を越える受け入れを達成した。国別内訳は以下の通り、インド 2 回、マレーシア 2 回、オーストラリア 2 回、フィンランド 1 回、エジプト 1 回、アメリカ 1 回、台湾 1 回、インドネシア 1 回。

・先進校としての発表回数

今年本校主催の発表のみならず、他の SGH 指定校との交流発表を行うなどして発表回数を増加させた。その結果 16 回の発表の機会を創出することができた。NPO などをはじめ、多くの社会団体より発表の機会をいただくことができた。なお、この集計に課題研究コンテストでの発表は含めていない。加えて、本校主催による発表回数は 3 回である。（2 月 SGH 研究報告会、5 月課題研究成果発表会、9 月中間発表会）

■本年度の総合的評価

SGH 指定当初の目標をほぼ達成することができた。特に、課題研究活動に対する社会的広がりが、外部から学校へ、また、学校から社会へ双方向に広がったことは、指定 5 年目として重要な成果であったと捉えている。一方、社会の中で学びを深める機会は、本校の対象者人数からすると不足している事実もある。また、数字で計ることが容易ではないが、受講生の意識変化が生じていることから、SGH 事業が一方向的なものではなく、生徒の自主性に基づいた活動へと変化している事は評価に値すると自負している。課題研究の評価をどのように行うかに関連し、ルーブリック運用をより有効にする方法は継続して模索しなければならない課題だ。

8 5 年間の研究開発を終えて

(1)教育課程の開発を終えて

■スーパーグローバルハイスクール指定後のグローバル・リーダー育成に資する教育課程における変化、工夫について

本校は、普通科 5 コース、英語科の合計 6 科コースが独自の特性に従った教育を行っており、教育課程もそれぞれに従って編成している。また、本校は、総合的な学習の時間において、学園の教育理念に基づいた独自の取り組みを行っている。そのため、学校設定教科・科目を利用した教育課程を編成した。学校設定科目にグローバルスタディーズを新設し、学校設定教科にグローバル課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを設置した。その設定に当たっては、現代社会を 1 単位減じ、グローバルスタディーズへ 1 単位充当した。

■先進的な課題研究等の実績を踏まえた、グローバル・リーダー育成に資する発展的な実践について

・海外フィールドワークについて

本校はグローバル課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのテーマを「途上国の貧困の悪循環の是正に高校生が貢献できること」と設定している。そのため、カンボジアフィールドワークとミャンマー研修を課題研究に資する海外研修と位置づけて重点的に内容や取り組みの改革を行ってきた。

特にカンボジアフィールドワークについては、1 年次の渡航目的を「現地を知る」と設定し、カンボジア社会をヒアリング調査や体験を通して構造的に明らかにすることと貢献に対して生徒

個々が独自の見解を見出すことに重視して実施している。この経験を、SGH 研究報告会等を通して学園全体に周知し、課題研究に取り組む姿勢を育んでいる。

本校の特徴としては、2年次にもカンボジアフィールドワークを実施している点だ。1年次の学びと渡航経験を踏まえて、2年次に改めてカンボジアへ渡航する。2年次の目的は「実践活動に取り組む」ことであり、14のゼミがそれぞれ取り組んできた Action Plan の実践を渡航する生徒が代表して行う。このように、複数回渡航するチャンスがあること、考えたことを実践する機会がある事は、社会課題を自分ごととして捉えることができる機会を創出することに繋がっていると自負している。実際、高校生として社会課題に対する意識変化は本校が独自に実施しているグローバルアンケートの変容からも見て取れる。変化の具体的内容は「(3)生徒の変化について」にて、後述する。

・国内フィールドワークについて

本校のSGH事業は、2年次に14のゼミに分かれて取り組む課題研究活動が中核をなしている。そのため、国内フィールドワークを学園が研修として実施するのではなく、各ゼミの担当者がそれぞれのテーマ性に従って、独自にフィールドワークや実践活動を設定している。この取り組みは、生徒の学びに対する個別最適化の観点から、妥当性があると自負している。一方、ゼミの垣根を越えた研修もSGH運営部が主導して実施しており、画一的な取り組みと個別最適化すべき取り組みとを融合させた研修のあり方にチャレンジできた事はSGH事業の大きな成果の一つである。

・ソーシャル・リーダーシップ・キャンプの開催

平成29年度から本校とNPO法人日本ファンドレイジング協会が主催する社会課題解決ワークショップを実施している。岡山県内で活躍するNPOや社会団体から、実際に社会課題を教示して頂き、ヒアリング調査を通してその課題を生徒が構造的に理解することを目指す。その上で、高校生ができることを社会団体に提言するプログラムである。実際に平成29年度、30年度に生徒が提言した内容がNPOとの協働事業に発展した経緯を踏まえると、高校生の学びを広げ、深化させる発展的取り組みであると自負している。今年度から、他校の参加も呼びかけ県内5校、43名の参加により開催できた事は他校連携、社会連携の観点からも有意義であった。

・カンボジア合同研修会の開催

カンボジア研修を推進しているSGH指定校が協力し、指定初年度より継続的に実施してきた。高校生が都道府県の垣根を越えて共に学びあう機会を創出できた事はSGH指定を契機とした成果だ。特に今年は、SGH、グローバル型、WWL連携校など、各学校の取り組みが多様化した。協力体制を継続して第5回目を実施できた事は各学校の自走化に向けた動きからしても大変有意義であった。

・社会で学ぶ場の創出（校外で学ぶ機会の創出）

一昨年度より、生徒の自主的な活動が活発化してきたことを踏まえ、校外での研究発表やシンポジウムへの登壇、NPOや行政が主催するイベントでの活動報告などを積極的に行っている。このように社会に対して自らの学びを報告できる機会を創出できた事はSGH事業を契機とした大きな変化であった。

(2) 高大接続の状況について

SGH指定の5年間を通した高大接続の状況を以下に報告する。「課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数」は指定初年度より5倍の増加を達成することができた。

連携した高等教育機関は2大学（1年目）から4大学（5年目）と数の変化は大きくないが、連携回数が多くなったことから、連携のあり方の変容が本校の大きな成果だ。なお、大学の単位履修制度の設置は無い。

資料1 課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数経年変化

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目
延べ数	12名	35名	53名	51名	64名

■ 高大連携事業の取り組みと変化

・ 高大連携授業の変化

当初は高大連携授業として一方向的な講義形式からスタートした。2年目以降、院生や学部生に協力を頂きながら、アクティブラーニングの手法に基づく講義展開を大学教員と共に実現することができた。3年目以降は、大学教員のインプットに基づき、院生や学部生によるアクティブラーニング形式の授業内容を本校教員と協力して作成して実施する形式に変更した。これにより、関係する人数が大きく増加した。また、この取り組みが少なからず院生、学部生の学びの場となることもフィードバックから明らかになったことから、相互に学びのある高大連携事業のあり方を模索し、取り組むことができた意味は大きい。

・ 大学の取り組みとの連携について

今年度は、12月のカンボジアフィールドワークの行程中、2日間を岡山大学教育学部の教授、院生、学部生と共に活動することができた。既存のプログラムをベースとし、連携の有無や目的を共有しながら協働できた意味合いは非常に大きい。また、学生と生徒同士の交流や、大学教員と高校教員の交流を含め、連携が形式に囚われない形で実現できたことは今後の自走化に向けた取り組み策定において大きな経験となった。

また、甲南大学の取り組まれている高大連携事業であるSDGsチャレンジを、その終了後も本校の課題研究として継続的に実施することで、今までにない高大連携のあり方を実現させることができた。以上2点の取り組みを中心に、一方向的に求め合う高大連携事業から、相互理解型の高大連携事業への変化は、SGH指定を契機にした成果だ。

(3) 生徒の変化について

生徒の変化について、本校が独自に実施している約60項目からなるグローバルアンケートの変容から以下にまとめる。また、本校が設定するグローバル・リーダーの5つの資質に照らし合わせることで資質養成の達成度も合わせて報告する。

なお、資料はSGH1期生（H27~29年度在籍）、2期生（H28~30年度在籍）、3期生（H30~R1年度在籍）の3年間のデータを基に述べ、各質問項目に対して「当てはまる」と回答した割合を記載している。また、比較資料はそれぞれの学年が3年時のものを掲載し、3年間の変化が他の因子と比較してどの程度育成されているかを述べる。

資料2 グローバル・リーダーの資質に基づいたグローバルアンケートの推移

	異なる意見を尊重できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	63	73	72	60	85
2期生	71	72	70	57	90
3期生	78	81	80	65	94

(%)

	自己意見で人を説得できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	48	44	47	34	57
2期生	41	42	44	32	64
3期生	44	48	47	32	55

(%)

	異なる価値観とコミュニケーションできる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	51	55	57	39	69
2期生	43	49	47	34	74
3期生	49	55	57	38	71

(%)

	異なる価値観と協力し新価値観を創出できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	52	53	53	38	78
2期生	45	53	53	35	74
3期生	50	57	61	42	78

(%)

	物事を客観的に判断できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	48	65	59	49	69
2期生	54	55	60	45	74
3期生	55	67	67	52	75

(%)

	国内ボランティア経験			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	56	54	63	69	88
2期生	71	72	65	68	90
3期生	70	69	72	64	100

(%)

	問題解決のために計画実行できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	45	50	48	38	42
2期生	45	41	48	31	75
3期生	41	56	51	38	61

(%)

	今後も継続して貢献活動を行いたい			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	—	80	88	97	96
2期生	93	89	86	89	91
3期生	94	89	90	84	100

(%)

	自己意見を英語で表現できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	18	25	21	8	23
2期生	15	21	25	9	40
3期生	13	19	21	8	29

(%)

	問題解決のために計画できる			比較資料	
	1年次	2年次	3年次	非対象	海外FW
1期生	51	47	59	39	62
2期生	50	48	54	37	77
3期生	51	62	59	42	78

(%)

岡山学芸館高校グローバルアンケート結果より本校作成

1. グローバル・マインドの育成について

グローバル・マインドは主に多様性への理解、他者理解、コミュニケーション力の育成を1年次の授業を通して養成している。「異なる意見を尊重できる」ことは、他者理解のための大切な要件である。これに対して卒業時にはSGH対象クラスの70~80%が「当てはまる」と回答している。また、「異なる価値観とコミュニケーションできる」ことは、異なる他者を受け入れるだけでなく、双方向の行動が取れることを意味することから、グローバル・マインドの重要な要素として設定している。この項目は3年間の成長率が6~14%と経年の成長が顕著である。このことから、グローバル・マインドの育成は順調に育成できている。

2. 論理的思考力について

論理的思考力は、1年次の教材を通してその基礎を養い、2年次の課題研究活動にて、実践することでその養成を行っている。「問題解決のために計画できる」については、1~3期生を通して約60%の生徒が「当てはまる」と回答している。また、1年次からの成長も4~9%となっている。SGH

非対象クラスとの比較からしても、SGH 事業が論理的思考力の養成について有効であることがわかる。一方、「問題解決のために計画実行できる」項目については、全体的に 10%ほど数値が下がる。計画に留まらず、実行することへのハードルが高いことがうかがい知れる。しかし、ながら、非対象クラスとの比較より、SGH 受講者のスキル養成は順調に推移していると捉えている。

3. 交渉型コミュニケーション能力について

資料 3 SGH 対象クラス卒業時における CEFR 達成者内訳

交渉型コミュニケーション能力					参考資料
	C1	B2	B1	合計	対象者数
SGH 1 期生	0	9	76	85	230
SGH 2 期生	1	13	111	125	322
SGH 3 期生	2	18	101	121	260

交渉型コミュニケーション能力は主に 2 年次の課題研究活動を通して養うことを目標としている。「自己意見で人を説得できる」項目では、SGH 非対象クラスとの比較においては優位性があるものの、経年変化は思っていたよりも低い。しかし、海外 FW 経験者の数値は総じて高いことから、実社会で活動するか否かとの相関があることがうかがい知れる。英語力に関しては、CEFR B1 以上の英語力を有する生徒が今年 46.5%と例年と比較し 7.5%UP と飛躍的に向上した。(SGH1 期生: 37%、SGH2 期生: 39%) また、資料 3 から見て取れるように、CEFR 達成レベルも年々向上していることが分かる。このことから、英語の運用能力は大幅な成長を達成できており、英語を用いた課題研究発表やコミュニケーション英語改革等、この 5 年間の取り組みが実を結んだことが分かる。「自己意見を英語で表現できる」数値を向上させるために、生徒の英語に対する自己肯定感を向上させる取り組みが必要だと捉えている。

4. 協働力について

協働力については、異なる他者と協働するマインドと行動力で、その養成を計っている。先述したとおり、「異なる意見を尊重できる」「異なる価値観とコミュニケーションできる」数値においては、成長を感じることができている。これに留まらず、「異なる価値観と協力し新価値創造できる」項目において「当てはまる」と回答した生徒は、年度を追うごとに向上し、3 期生は 1 年次と比較して 11%の成長を成し得た事は協働力の育成が順調であることを意味している。

5. 実践力について

実践力については、考えたことを社会の中で実践する機会を生徒に求めることで、社会の構成員としての意識醸成と自らの課題研究に対する自信の醸成がなし得ると捉えている。「国内ボランティア経験」は、学園として社会貢献活動を推進していることもあり、SGH 対象、非対象に関わらず今年も高い参加率を達成することができた。コロナウィルスの関係で年度末に予定していたボランティア活動や課題研究に関わるフィールドワークが中止または延期になったことから、全体的に数値は下がったことは致し方ない。また、「今後も継続して貢献活動を行いたい」生徒も総じて高い数値を示しており、本校の生徒が社会に対する高い意識を育てていることが分かる。特に SGH3 期生は 1 年次から 7 割の生徒が社会活動に参加しており、1 期生との比較において、生徒の変化は目を見張るものがある。

6. カンボジアフィールドワーク参加者の意識変容

1年次と2年次に実施しているカンボジアフィールドワークの参加者(1回20名×年2回実施×3年間=120名対象)を抽出して集計したところ、その優位性が顕著に明らかになった。全ての項目について、SGH対象クラスと比較しても10~25%高い数値を示している。このことから、カンボジアフィールドワークに参加することが、SGH事業の意図するグローバル・リーダーの資質養成に大きく関係していることが分かる。また、SGH1期生と比較し、SGH2,3期生が総じて高い数値を示していることから、SGH事業の学園における有効性が見て取れる。カンボジアフィールドワークの参加の有無に関わらず、同様の経験および意識をより多くの生徒が体験、醸成できるよう取り組むことが、より有効なプログラム作りのために必要である。

7. 課題研究を通じた成長の実感について

資料4 SGH卒業時における成長の実感について

質問項目	SGH1期生	SGH2期生	SGH3期生	参考
				1期生との比較
視野が広がった	70	75	90	20
新たな発見や思考を持つようになった	69	73	90	21
世界の出来事への興味が深まった	65	63	81	16
自分の考えを发表或しりディスカッションできるようになった	46	54	63	17
社会問題に高校生ができることがあると思う	65	69	86	21

(%)

岡山学芸館グローバルアンケートより本校作成

資料4はSGHの授業を通じた成長の実感について調査した結果である。卒業時における数値をまとめ、本アンケートに対して「はい」と回答した割合を示している。(回答選択肢:「はい」「いいえ」「どちらでもない」)

この結果から見られる変化は、経年により生徒の社会に対する自己肯定感が高まっていることが分かる。参考として1期生と3期生との比較を掲載しているが、全ての項目に対して約20%の成長が見て取れる。「視野が広がった」「新たな考えや思考を持つようになった」の項目は、社会を多面的に俯瞰して捉える力が養われたと自己評価していることが伺える。「世界の出来事への興味が深まった」に対しても顕著な変化が見られることから、日本社会以外にも興味関心を抱く生徒が増加していることが分かる。内面変化で最も注目すべきは「社会問題に高校生ができることがある」の項目に対して21%の伸びを示し、3期生卒業時点(R1年度)で86%の生徒が「はい」と回答している。対象人数から逆算し、SGH3期生260名中224名がこのような自己肯定感を育めた事は非常に大きな成果である。

また、「自分の考えを发表或しりディスカッションできるようになった」の項目に対して「はい」と回答した生徒も1期生と3期生を比較して17%の向上を示していることから、課題研究活動において、多くの生徒が発表機会を得て、その経験を肯定的に捉えていることが分かる。課題研究活動は「社会的事象を俯瞰して捉え、自分ごととして考える」事が基本的な作業になると捉えている。このような自己肯定感の向上が、全SGH対象クラスに対して広がりを見せていることについて大きな成果であると自負している。

(4)教師の変化について

資料5 教職員アンケート結果(H29~令和元年度)

1. SGH活動は重要だと思う

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	78%	20%	0%	3%
H30	59%	38%	3%	3%
H29	70%	27%	0%	2%
H28	49%	51%	0%	0%

7. SGHの活動を通して、生徒の変容が見られた

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	38%	50%	10%	0%
H30	46%	49%	5%	0%
H29	27%	66%	7%	0%
H28	31%	51%	18%	0%

2. SGHの内容に興味がある

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	55%	38%	8%	0%
H30	43%	57%	3%	0%
H29	52%	41%	5%	2%
H28	40%	49%	11%	0%

8. SGHの活動により、外部機関とのかわりが増えた

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	69%	31%	0%	0%
H30	65%	27%	5%	3%
H29	48%	48%	5%	0%
H28	51%	42%	7%	0%

3. 本校のSGH活動に賛成できる

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	75%	25%	0%	0%
H30	65%	32%	5%	0%
H29	64%	34%	0%	2%
H28	44%	53%	2%	0%

9. SGHの活動が自分の授業や指導方法に影響を与えた

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	26%	44%	28%	3%
H30	19%	43%	32%	5%
H29	25%	59%	16%	0%
H28	27%	58%	16%	0%

4. 昨年に比べてSGH活動の内容が向上した

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	36%	59%	5%	0%
H30	41%	59%	0%	0%
H29	61%	32%	7%	0%
H28	62%	31%	7%	0%

10. 以前に比べて英語への学習意欲が向上した

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	21%	56%	21%	3%
H30	27%	51%	19%	3%
H29	20%	55%	25%	0%
H28	11%	53%	33%	2%

5. 昨年に比べて全校実施体制が進んだ

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	31%	46%	21%	3%
H30	27%	62%	8%	5%
H29	30%	59%	9%	2%
H28	33%	49%	18%	0%

11. SGHを受講するようになり、生徒の進路選択に変化が見られそうだ

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	46%	36%	18%	0%
H30	27%	57%	16%	0%
H29	41%	43%	16%	2%
H28	18%	56%	27%	0%

6. SGHの活動は生徒の可能性を広げると思う

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	67%	31%	3%	0%
H30	78%	19%	3%	0%
H29	75%	25%	0%	0%
H28	60%	40%	0%	0%

12. SGH活動を通して、教育活動(教育内容)の変化の必要性を感じた。

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	44%	51%	5%	0%
H30	41%	59%	0%	0%
H29	—	—	—	—
H28	—	—	—	—

13. SGHの指定が終了した後も、このような課題研究活動を継続すべきだ。

	とてもそう思う	そう思う	あまり思わない	全く思わない
R1	63%	38%	0%	0%
H30	51%	46%	3%	0%
H29	—	—	—	—
H28	—	—	—	—

教職員アンケートより本校作成

教職員の意識変化は年度末の教職員アンケートを用いて把握している。まず、SGH事業を通じた生徒への意識変化について言及する。資料5問6の「SGH活動は生徒の可能性を広げると思う」に対して「とてもそう思う」と回答した教職員は、H28年度(指定2年目)と比較しH29年度(3年目)が15%、H30年度(4年目)が18%、R1年度(5年目)が7%と向上している。これより、SGH事業が生徒の可能性を広げるものとして学園に浸透してきたことは、課題研究の全校実施体制に向けて大きな変化であると考えられる。また、問13の「SGHの指定終了後も、このような課題研究活動を継続すべきだ」との問いに対して「とてもそう思う」と回答した教員がR1年度において、前年比12%の向上を示していることから、SGH事業の必要性を最終年度に改めて重要視する

必要性を教職員が感じている結果となった。特に問1「SGH活動は重要だと思う」に対してH28年度(2年目)は「とてもそう思う」が49%と過半数を割っていた現状からR1年度は78%と29%の向上を示している。このように、新しい教育のあり方に対する認識変化はSGH事業を契機とした最も重要な変化であったと捉えている。

また、問11の「SGHを受講するようになり、生徒の進路選択に変化が見られそうだ」に対して「とてもそう思う」と回答した教職員がH28年度(2年目)と比較し28%向上していることから、SGH事業が教職員の受験指導意識にも変化を与えていることが見て取れる。総じて、教職員の意識変化が顕著に見られた事はSGH事業の大きな成果であると認識している。

(5)学校における他の要素の変化について(授業、保護者等)

■授業の変化や改革について

①コミュニケーション英語の改革

SGHの指定をきっかけに、英語で課題研究内容を発表する機会が多くなった。これに呼応するため、H29年度より、コミュニケーション英語の改革を推進した。改革の内容は、授業内にて自らの興味関心に従った社会事象を調べ、まとめ、英語で発表するものだ。相関性については不確定要素が多いが、先に述べた英語力の向上から見ても、その有効性について一定の評価に値すると捉えている。

②教員独自の授業法の改革、チャレンジについて

各教職員がそれぞれ受け持つ授業内において、新たな教授法の開発を行ったり、チャレンジする機会が多く見られるようになった。以下、教職員の取り組み例(教職員アンケート調査から抜粋掲載)「ディスカッション形式の授業が増えた。動画を配信する形式で集合型の授業の排除可能性を模索している。テストなどでの問い方を変更している。(公民)」「(難易度の高い問題を)グループで考えさせる機会を設けるようにした。(数学)」「3学期よりクラッシーの振り返りアンケートを利用して毎時間答えさせるようになった。また、授業中の解説もなるべく省き、生徒たちに文法書・単語帳を使って探させた。(国語)」「トピックに関し動画などで導入、その後関連記事など読んだあとディスカッションなどで深める授業を試している(英語)」。

このような変化は、教員の自主性に基づくものであり、SGH事業を契機とした大きな変化だと捉えている。

(6)課題や問題点について

研究開発・実践において課題として明らかになった点を以下にまとめる。

①社会連携のあり方について

社会連携活動を実施する際、それぞれが連携事業に求める目的を、時間をかけて共有し、ベクトルを合わせながらプログラムを作成する重要性を感じた。一方向的なプログラムは、連携するお互いにとって、新たな教育手法開発には繋がりがづらい。実現できた際の教育効果は、我々の想像を越える結果を生むことも分かった。一方で、連携のあり方を、時間をかけて共有する事は物理的な障壁も生じる。教育機関が一方向的に社会団体(高等教育機関を含む)に連携を求めるだけでは教育効果は最大化できない。まずは、我々が何を目的に連携するのかを明確にするカリキュラムマネジメントの重要性を感じている。

②授業評価の手法について

課題研究の授業評価については様々な見解がある。ルーブリックの活用等において、生徒の活

動状況を可視化させる事は可能となった。しかし、それを結果としてどのように評価するのかは答えを出せないままだ。第三者の評価は生徒の意識と活動を促進させる。ルーブリックを活用し、生徒の自己肯定感を向上させるための評価の手法開発は今後も継続しなくてはならない課題だ。

③フィールドワーク参加生徒と一般生徒のコンピテンシーに基づく成長度合いについて

先にも述べたように、課題研究用に設定しているカンボジアフィールドワークの参加者は総じて、本校の設定するグローバル・リーダーの育成に資する成長を遂げている。一般生徒の意識と活動も年々向上しており、生徒のみならず教職員の意識やカリキュラムも向上した。一方で、一般生徒とフィールドワーク参加者の開きをどのように埋めていくかが今後の最大の課題である。

課題研究を行うにあたっての、調査をはじめとする行動経験が一般生徒との大きな違いだ。一般生徒は文献研究、国内調査はおこなうものの、現地調査やアクションプランの実践の多くはフィールドワーク参加者に委ねることとなる。この実践に資する行動機会をいかに多く設定するかが今後の大きな課題だ。

④課題研究の指導方法について

1年次は5年間のオリジナル教材開発を通して、統一教材を用いた授業を展開できるようになった。そのため、授業担当者が毎年変わっても対応できる環境整備が整った。一方、2年次の本格的な課題研究の指導方法については、画一的手法の開発が難しい現状だ。統一教材は作成しているものの、この教材に従った指導法が全てではない。特に問題意識の造成、課題研究テーマの具体的決定には、生徒の思考や活動をファシリテーションできるか否かという、新たなスキルが必要だと痛感している。そのため、教材作成が生徒の成長と課題研究のレベル向上を促すことに直結するとは限らないことが分かった。本校はSGH対象生徒が全校生徒の60%であり、1学年約260名の生徒の課題研究を個別最適化させるための効果的手法はこれからも模索しなければならない大きな課題だ。

(7)今後の持続可能性について

研究開発を終えた取り組みの持続性については、次年度以降、対象生徒を全科コースに拡大（全生徒受講）して実施することを決定している。また、持続するだけでなく、SGHの取り組みを更に向上させるために、独自に開発研究を行う。そのため、5年間の成果と課題を校内議論およびSGH運営指導委員から頂き、次年度以降の取り組みに対して指針を決める。現在決定している指針の概要を以下にまとめる。

■対象生徒の拡大について

SGH事業では、全校生徒の60%（約800名）を対象に実施した。次年度以降の取り組みに関しては、対象を全ての科コースとし、3年後には全校生徒対象のプログラムとして実施する。

■海外研修の実施について

SGH事業で培った海外研修（フィールドワーク）のあり方については、継続して実施する。また、本校は様々な方面へ海外研修を行っており、各海外研修にフィールドワークの手法を取り入れ、将来的には全ての海外研修がフィールドワークの要素を担保できるように運営する計画である。加えて、次年度以降は生徒の課題研究成果を世界に発信することを目的とした、課題研究ツアーの実施を計画している。アジアツアー、ヨーロッパツアー、オセアニアツアー、北米ツアーなど、最終的には4方面への実施を目標に海外研修の改革を進める。

■学びの深化プロジェクトの実施

SGHの5年間を通して、課題研究活動を「自分と社会を関連付けて捉えること」「実社会の中

で考えたことを実践してみる」が教育効果を最大化させる一つの要因であることがわかった。先述したように、実社会で行動を起こした生徒は自己肯定感も高い傾向がある。そのため、私学なりに「社会に開かれた学校」のあり方を継続して模索する。

その中心となるのは、高校生を中心軸として縦横に広がる社会関係の構築である。この広がり生徒の課題研究を中心に捉えた学びの深化プロジェクトを実施する。具体的には、ソーシャル・リーダーシップ・キャンプで育んだ高校生同士の協働ワークショップの継続実施。県外の高校生同士で学びあうカンボジア合同研修会の継続実施、世界との協働を実現するための課題研究ツアーおよび、留学生との協働課題研究の更なる推進を実施する。このように、地域社会との協働、県外を中心とした国内の協働、世界との協働と3つのステージを用意することで、生徒が社会で自己表現できる機会を更に創造する。

■社会連携活動の更なる推進と課題研究の個別最適化の推進

社会連携活動の重要性はSGH指定の5年を通して必要不可欠であることを学んだ。そのため、今までは途上国を舞台としたグローバル社会のみに焦点を当てていたが、社会の繋がりやグローバル化は地域社会との密接な関係性に基づくことを鑑み、世界と地域とのつながりを俯瞰して捉えながら課題研究を行う。この変化は、グローバルな課題研究を進めるにあたり、自然発生的に地域課題研究の要素が生まれてきたことがきっかけである。課題研究の授業こそ、個別最適化により生徒の自主性とやる気を育める大切な教育手法であると考えている。このように、生徒の自主性に対して伴奏者となれるような教育カリキュラム開発に取り組む。

■海外インターシップについて

海外インターンシップについては、構想段階ではあるが、今まで多くの海外企業やNPOなどの社会団体と連携してきた経験と関係性を踏まえて実施できるように準備を進める予定である。2~3週間程度のインターンシップを模索している。

■グローバル・リーダーに求める資質（コンピテンシー）の改訂

5年間の開発研究を終え、今までの経験を踏まえたコンピテンシーの再考を行った。SGH事業の振り返りから、以下5つに改定し、次年度以降の教育プログラムを改革する。①「メタ認知力の育成」に取り組み、社会に生きる私を主体的に考えられる人を育てる。②「分析力の向上」に取り組み、課題分析力、社会的妥当性、論理力を更に向上させる。③「発想力の向上」に取り組み、イノベーションへの意識醸成と自らの思案する行動策定の深化を目指す。④「行動・実践力の向上」に取り組み、社会で実践することで、課題研究に対する主体性を育む。⑤「ソーシャル・マインドの育成」に取り組み、今までよりも更に社会を俯瞰して捉え、社会や異文化を多面的に捉える力を育む。

■管理機関の関わり方について

管理機関としても、課題研究の教育的効果を基にその重要性を十分に理解している。特にSGHの経験から人員配置での配慮は必要不可欠な支援だと捉えている。また、必要経費については、実施校担当者との会議を重ねながら十分な支援を目指す。

【担当者】

担当課	SGH 運営部	T E L	086-942-3864
氏 名	橋ヶ谷 多功	F A X	086-943-8040
職 名	SGH 運営部長	e-mail	hashigaya@gakugeikan.ed.jp